会員の広場	2022年8月１日発行メールマガジン第２５号

自然遺産　父島

リフレッシュ休暇をとって、７月１１日父島におがさわら丸にて出航。片道２４時間の船旅。酔い止め薬を２箱持ち、行ってきました。時節柄、事前に PCR 検査（強制ではない）を受け、リストバンドを渡されました。

翌日１１時に着くと、まず、島で昼食。旅の仲間とお店をのぞくと、船からの積み荷がまだ届いていないのか店の中は、妙に品物が少ない。コロナの影響で閉っているお店もある（飲食店は観光客は入れますが、地元住民はテイクアウトのみになりました）。島寿司を買って、近くの四阿で食べました。実際、PCR 検査済証明のリストバンドを提示しないとお店にははいれませんし、ガイド付きツアーも参加できないことがわかりました。

午後はガイドさんに小笠原の歴史を聞きながら二見港周辺を散策。小笠原ビジターセンター、聖ジョージ教会、小笠原水産センターを見学。

戦時中、母島の人が疎開の為に一時避難場所として生活していた歩行者専用のトンネルを通りました。本土に渡る船が来るまで、ここで待っていたそうです。今でも日陰で涼しいので、住民に必要な生活道路として使われています。

１３日は早く目覚めてしまい、朝５時に宿から徒歩１０分の宮の浜まで降りていきました。

６時ごろ宮の浜を出港する観光客らしくない集団の船をみかけました。１日ツアーに参加して、たまたま、お昼に宮の浜でお弁当を食べていると、ちょうど戻ってきた船を見て、ガイドさんが隣の兄島にグリーンアノールを捕まえるために出ていた船であることが判明しました。

ガイドさんの運転でマイクロバスを主要な場所で下車しながら、１周しました。

アカガシラカラスバトサンクチュアリー（ガイド付きでないと入れない）では、靴底の汚れをブラシでとり、木酢酢で消毒。アカガシラカラスバトには会えませんでしたが、いろいろな植物の観察が出来ました。昨晩、雨が降ったので、ふかふかに柔らかいムニンシラガゴケを触ってみました。

小笠原海洋センターで、ウミガメのエサやりを体験。ボランティアでウミガメの子供を歯ブラシで掃除しているのをみました。（質問してみると、甲羅に藻が付くと病気になりやすいので、１週間に１度は歯ブラシで掃除するそうです。旅行客も体験可能。）

夜はナイトツアーでオガサワラコウモリがリュウゼツランの花の蜜を吸っているところを見学。３頭位来ており、高いところをずっと上を向いて観察していたら、首が痛くなりました。
場所を移動して、淡い光ですがグリーンペペ（寿命は３日。雨が降らないと発生しないので見られない）も見ました。

１４日は南島に上陸（波はかなり荒く、上陸確率は60%。１日１００人限定。ガイドつきでないと上陸できない）
南島は沈水カルスト地形。扇池の白い砂浜は絶滅したヒロベソカタマイマイの半化石を手に取って眺めることが出来ます。
ガイドさんの説によると、洞窟の暗い場所に生息していたヒラベソカタマイマイが、洞窟の上部が崩落し、急に太陽の光を浴びたことによって絶滅してしまったのだそうです（真偽のほどは不明）。

コロナの影響で約２年間、観光客が来ない間に上陸地点に巣を作ってしまったカツオドリのヒナや卵を真近に観察。船に戻るにも足場が悪く卵を守る親鳥に威嚇されました。
午後は天候が荒れ、雨も降ってずぶ濡れになってしまったので早めに切り上げたため、残念ながらイルカなどの哺乳類は見ることが出来ませんでした。

最終日の自由時間に宮の浜でスケッチをしていると、外来種として問題になっているヤギの群れが岩場に塩を舐めに降りてきていました。ノネコ対策の罠や、グリーンアノールの罠など、父島も自然環境を守るため、いろいろ対策に苦慮しているのが、わかりました。（ノネコが減ったら、今度はクマネズミが増えすぎてしまい、夜明街道と呼ばれている場所が、地元の人にネズミ街道と呼ばれているなど・・・）

今回はガイド付きのパックツアーでしたが、初めて行くには島の事情もわかり、効率的に見ることが出来てとても良かったと思います。母島には行ける余裕はなかったので、いつか母島にもいってみたいと思っています。各国の紛争が終わり、コロナも治まり、安心して旅行が出来る日が早く来ますように。

市原市　梅宮玲子

野菜の花

お店で野菜を買うだけの人はその花を知らないかも知れません。
家庭菜園をやっている人はナス、キュウリ、トマト、オクラなどの果菜類が成る前の段階として花を咲かせる必要があるから、これらの花は普通に見ると思いますが、小松菜やレタスなどの葉物野菜は花が咲く前に収穫するのが普通、大根、ニンジンなどの根菜類も花が咲く前に収穫するでしょうから、これらの花には馴染みが少ないと思います。

私は家庭菜園を始めて２０年以上になります。元々土いじりは好きなので、珍しいものがあると片っ端から植えて楽しんでいます。それを見ている地主さんからそんなに好きなら余っている畑を無料で貸してやる声を掛けられる事もあります。
そんな申し出をありがたく受けていると管理する畑は増える一方、夫婦二人暮らしで消費する量をはるかに超えるので、近所や知り合いに配っても余ってしまい、何時までも畑に残す事になり、結果として色々な野菜の花を見ることになってしまいます。
以下に撮りためた写真の中から一部を拾い出してあいうえお順に並べてみました。

アピオス	エンドウ	オクラ	キュウリ	ゴマ
コンニャク	サツマイモ	サンチェ	シカクマメ	シュンギク
ソラマメ	エダマメ	トマト	ニラ	ニンジン
ハタケワサビ	フェンネル	ラッカセイ	ラッキョウ	ルッコラ

よく見れば意外にきれいな花があると思いませんか
同じ園芸植物でも花卉類は花を大きく、色彩を豊かに、多弁化の方向に改良されているのに対して、野菜は収量や味、耐病性などに改良のポイントが向けられ、花や蕾を食べるブロッコリー等特殊なもの以外、花には無頓着で育種されていると思います。その為、大玉トマトもミニトマトも花の大きさに差がありません。
野菜の花は人の手の加わっていない野山の花のような素朴な味があります。
世界の各地を旅して野菜の原種を探し、花に出会えたら楽しいだろうと思っていますが、先立つ金と・・・・

佐倉市　坂本　文雄

８月の加曽利貝塚

田んぼは多くの生き物を育てているという。加曽利の木々も色々な生き物を育てているのではと思う。年月が経った木の幹にコケ・地衣類やキノコなどが生える。特にクワやイヌシデ・コブシの幹はチャタテやカタツムリ、コケガやコヤガの幼虫がよくみられる。この時期に幼虫が地衣類食のキノコヨトウ・ウスバフタホシコヤガが見られる。私はまだこの幼虫を見たことがない。他に地衣類を食べる幼虫を見るが親の姿がわからない。

コナラ・クヌギ・シラカシ・アカガシ・アラカシ・スダジイなどの実の成長や樹液に集まる虫達と樹液を出させてそこに集まる虫を食べるボクトウガの幼虫の姿も間近に見られる。ドングリに卵を産んで切り落とす、ハイイロチョッキリのお仕事も見られる。コナラの実がなくなるとシラカシの実に移っていく？ようだ。加曽利の木々めぐりは楽しい。

松本　美千代　　（千葉市）

夏の養老渓谷

数年前夏の養老渓谷へ行った。到着して養老川に下りたら別世界のように涼しい。人の多い粟又の滝付近を通り過ぎ、マイナスイオンをたっぷり浴びながら、遊歩道ではカジカガエルの鳴声と川のせせらぎの音だけ。川の魚の種類は？と観ていたらコオニヤンマがひと休みしていた。給水をしているスミナガシ、ハグロトンボ、サワガニなどが観られ満足。向こう岸にはイタチの家族までが出現して目を楽しませてくれた。いつまでもいたかったが、川から上がって食べたイチゴヨーグルトかき氷は美味しかった～。今年の夏、久しぶりに行きたいな。

山下　美佐子　　（東金市）

植物雑感『ネムノキ』：合歓木・別名：ネブ・マメ科ネムノキ属・Albizia julibrissin

私がネムノキの花を見たのは植物に興味を持った頃です。家の近所に大きな盃型の樹があり、夏になると牡丹刷毛のような赤い絹糸のような花が一杯に咲き、変わった花だなと感じました。花は薄暮の頃から開き始め、翌日の昼まで咲き続ける。花には上品な香りがあり、この香りを求めて虫たちが集まってきます。大きな羽状複葉の小葉は、夕方になると左右が寄り合わさって、力が抜けたように垂れ下がり、眠ったような姿になります。これを就眠運動というそうです。

田中肇さんの著書「花の顔」には『目ざとく花を見つけて飛んでくるのは3cm以上もある口をもつスズメガだ。半球形のブラシの中央にある蜜を吸う間に、スズメガはしなやかな雄しべ、雌しべにやさしくなでられることになる』とありました。

名前は葉が夜に閉じることに由来。漢字で「合歓木」と書くが、この合歓（ごうかん）とは、歓楽を共にすること、夫婦が同衾することであるが、葉がピッタリとくっつき男女が共寝する姿に似ているための名前。また別の由来には、ネムノキの春の芽吹きが、きわめて遅いところからという説もある。この木を知らない人は、あまり芽立ちが遅いので、枯れ木と見誤るくらいである。日当たりのよい場所に、いち早く育つ，先駆的な陽樹です。

松尾芭蕉が奥の細道で詠んだ有名な歌に

「象潟（きさがた）や　雨に西施（せいし）が　ねぶの花」がある。

（象潟はいま雨、その雨に濡れた折りしもの、合歓の花の表情は中国の伝説の美女西施が憂いを含んで目を閉じているようだ）。西施とは、中国の春秋時代の越の伝説上の美女。中国の四大美女（楊貴妃、西施、王昭君、貂蝉（ちょうぜん））の一人である。

「奥の細道」の旅で芭蕉は、松島とともに象潟を見学するのが、大きな目的の一つだったようでつぎのような文を残している。

（現代語訳・抜粋）：全体に潟の広さは縦横一里ほどで、その様子は松島に似ているがまた違っている、松島は美人が笑っている様な感じだが象潟は恨んでいるような感じがある。寂しい感じに悲しみが添うてこの地の様子は美人が心を悩ませているような感じである。

（注）元禄2年6月16日、芭蕉は象潟で雨に打たれた「ネムの花」を詠んだ。いにしえの象潟（今は秋田県にかほ市）は、波静かな島々が浮かぶ、それはそれは見事な景勝地で当時は松島と並ぶ名勝とされていた場所。文化元年（1804）の大地震にて海岸が隆起して、潟の海水が失われた為に、現在は潟はなくなり陸地になっている。

小島紀彦（我孫子市）